

## 村上春樹研究—その暴力表象について

松枝 誠

本研究の目的は、村上春樹作品における暴力の諸相を検討する点にある。対象とする作品は、「僕」を主人公とする三部作である、学生運動が終焉した一九七〇年代の著者の故郷を描いたと想定される『風の歌を聴け』『一九七三年のピンボール』、北海道を舞台とし、日本の近代化に伴う暴力が複層的に描かれる『羊をめぐる冒険』、そしてその続編である一九八〇年代の高度資本主義社会を描いた『ダンス・ダンス・ダンス』、最後に、これらの集大成となる、日中戦争の記憶が現代に顕在化される状況を描いた『ねじまき鳥クロニクル』である。

ポツダム宣言を受諾し、アジア各国の植民地を放棄することで終戦を迎えた日本は、以後、平和憲法の名のもとに経済復興を果たす。しかし、戦後のそうした平和や復興とされるものが、朝鮮戦争やアジアへの経済進出を背景とした、戦争を継続する形式の暴力を内在化したものであったことは、論を待たない。それは戦後の日本国内においても、マイノリティーへの差別や排除という形で表立って現れている。しかし、そうした暴力は、一九六〇年代以降の高度経済成長、それに伴う都市化によって常に隠蔽され、消去されている。

村上作品も、学生運動が終焉した一九七〇年以降の都市が舞台とされ、消費社会の中で享樂的な生活を送る人物が主人公となる。そこでは、現在自らが加担している暴力は隠蔽されている。しかし作中で、そうした場が幻想であることを暴露するのが、アジアをめぐる暴力の記憶の噴出である。それは、高度経済成長期に行なわれた故郷の埋め立てに際して排除されたものとして想起され、あるいは、戦前のアジアへの大陸進出に利用されながらも戦後には忘却された羊として探求される。しかし、こうした記憶も、高度資本主義によって抹消されつつある。そして、そうした記憶を略取することで戦前の暴力を反復させようとする人物が、主人公の前に現れる。村上作品は、こうした記憶の噴出が描かれることで、それを隠蔽するのではなく、現在に定着させ、継承することを図っている。本論では、そうした記憶を検証することで、隠蔽され、消去される暴力を顕在化させ、現在も行使されている暴力に対する責任について考察する。

村上はこの後、自らの作品で描いた暴力に、オウム真理教による地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災を重ね、それに対する作者としての責任を思考している。こうして作者によっても行なわれる作品の探求を行ない、暴力に対抗する新たな場を構築したい。